
トリカエラレタモノたち

六文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリカエラレタモノたち

【Nコード】

N4218K

【作者名】

六文

【あらすじ】

小さな子供が大の大人を従えている奇妙な主従。謎に包まれた青い眼の異国の少女。何か秘密があるらしい長屋の女房。そしてその女房の娘は主従の一人に想いをよせていた。大阪の役から六年後、少しずつ活気を見せ始めた江戸城下町での小話である。

（大体一話完結で、本命の連載の息抜きに書くので気まぐれ更新となります。）

序章 童謡（前書き）

この物語は実際の人物・団体には全く関係ありません。
フィクションです。

序章 童謡

花のような秀頼さまを
鬼のような真田が連れて来て、
退きも退いたよ加護島へ

「兄ちゃん、その歌なに？」

「ん．．．童歌さ」

「童歌？」

「そ．．．．嘘も真も全て含む童歌さ．．．」

戦国末期、徳川と豊臣が睨み合った末に起きた大戦は徳川方の勝利にて終わった。

しかし、戦の終わったあとの治安はまだまだ完全に安定したわけではなく、様々な浪人が右往左往としており、その中には豊臣方の残党もいると思われた。

*

「うわっこいつ変な目してやがる！」

「青い目．．．」

「鬼じゃ！鬼じゃ！」

江戸と呼ばれた城下町のとある裏路地で子供たちが戯れていた。

否、一人の子供をいじめていた。

「なんでこんな目してんだよお！」

一人の子供がその子の髪を引っ張った。

引っ張られた子供はうつとうなりながら、乾いた唇で何かを呟いた。

「何言ってるのかわかんねえ」

「やめろって、きつと鬼の子供だよ。」

すぐに親が来るかもしれねえぞ。」

「いやいや。ここでやっちまおうよ！」

鬼の子供ならなおさらやっつけちまわないと！」

子供たちは一斉にその弱った子供に暴拳を奮おうとした。

その時、小さな影がその子の前に躍り出た。

どうやら男の子のようだ。

「やめよ！」

お主ら、それでも人の子か！」

「俺達は人の子だけど、そいつは人の子じゃねえぜ」

ある子供が歌うように言った。

それでも立ちふさがる子供は一喝して言った。

「過ちて改めざる、これを過ちと謂う」

子供たちは首をかしげた。

すると解説するようにまたその子は話し出した。

「過ちは仕方がないが、過っても改めない事が本当の過ちという論語だ。」

お前達も本当の過ちになる前に、この者に対し、悔い改め、謝るといい。」

子供たちはなんとなく気まずそうに顔を見合わせた。

それでも一人の子がまた大声をあげた。

「それがどうしたってんだ！」

こちとら母ちゃんに怒られてイライラしてんだよ！

庇うつてんなら、こっちからやるぞ！」

いじめっ子の一人ははらいせにいじめをしていた。

大柄な子供が拳を振り上げて、男の子を殴ろうとした。

男の子はどうか逃げ切ったが、次の拳が顔面に当たった。

口の中が切れて、血が出てきた。

後ろで守られていた子供が心配するようにゆっくりと顔を上げてみ
てきた。

「案ずるな。これしきのことなんともない。」

安心させるように男の子はそう言った。

だが、他の子供たちも調子にのって一斉に殴りかかろうとしてきた。
さすがに無理かもしれないと一瞬迷ったが、決してその場を逃げよ
うとしなかった。

その時、大きな影が出来た。

「うわっ。大人だ！」

「逃げるー!!」

子供たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

男の子の目の前に立っている青年が口を開く前に男の子が叫んだ。

「大助！」

男の子は有無を言わずに先ほどの青い目の子供を押し付けた。

「この子供、かなり弱っているようだ。」

「はやく、手当てしてやってくれ。」

青年ははあと溜息をつきながら、押し付けられた子供の容態を見た。
熱はないが、栄養失調なのか酷く軽い。

よくある話で、たぶん野垂れ死にしそうになっていたのだろう。

悪ければカラスあたりの餌になっていたかもしれない。

「頼吉様・・・あとで説教でございますからな」

小声で呟かれた青年の言葉にうつと男の子はうめいた。

「見逃してくれてもいいものを・・・」

子供の呟き声は空中へと消えた。

*

「……」

そわそわしながら頼吉はあちこちに目を泳がせていた。

「頼吉様」

びくつとなつて姿勢を正した。

「某は申しましたぞ。」

外へお出になる時は決して裏には近づくなと。

おかげで、こんな怪我をこさえてこられて……。

本来なら外出も禁じたいぐらいでございますぞ。」

「しかし！わしが行かねばあの子は死ぬところであつたのだぞ。」

「貴方様も当たりどころが悪ければ死ぬところでした。」

頼吉は黙った。

ぐうの音もでなかった。

実際大助の弟が石合戦の最中に打ち所が悪くて死んでしまったのを知っているのだ。

石合戦というのは、戦国時代の合戦を模して、二手に分かれて石をぶつけ合

うことである。

「……子供は容赦がありません。」

そして、悪どい大人であつたなら尚更です。

一歩間違えれば命取りであつたのかもしれないぞ。」

そんな説教のなか大助の内心は全く違つたものであつた。

ただ頼吉のその弱いものを守ろうとした、その心意気に賛美を送りたくて仕方がなかった。けれど、そこは許されないもの。そこを褒めて、また同じ事をされて危険なめにあわれてはたまつたものではない。

「……暫くはここで反省していただききたい」

大助は出て行つた。

壱巻 歌舞伎者

明るい日差しが自分をさした。

身を起こそうとして、身体がきしんだ。

鋭い痛みが全身をさして今にも意識が飛びそうになった。

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

声はでなかった。

痛みに縮こまっていると、あの少年と一緒にいた男が入ってきた。

「痛むのか!？」

男は少し慌てて、私の腕を見ようとした。

「青あざが・・・冷やしたほうがいいな」

男は近くを通りかかった女の人に氷を頼んだ。

私はその好意に酷く感動した。

「何も泣くことはあるまい」

男は困ったように私の涙を拭った。

「私は大助だ。」

お前の名はなんというのだ?」

私は出せない声を必死に出そうとした。

モネ

口の形で男は読み取れたのか何度か頷いた。

「もねというのか。」

声が出ないのか?」

私は何度も頷いた。

「今医者も呼んできてもらっている。」

少しその腕の痛みも我慢してくれ。」

私は何度も何度もその小さな頭を縦に振った。

＊

「はあ！？孤児を拾ったただあ！？」

「ああ」

「お前が！？」

「正確には頼吉様だ」

「結局お前が養うようなもんだろぅが！」

大助と今一人、歌舞伎者と思われそうな男が話していた。
男の名は信太郎。

はつきりいつて身元不明に近い、謎の人物である。

ただ、大助に住める場所を紹介したのはこの信太郎だ。

「どうすんだよ。」

「仕事を増やす。」

「どこで」

大助は考えた。

考えた末に言った。

「だから、お前のところに来た。」

「ああ頼りにきたのね。」

もうちょい率直に言ってくれ。

遠まわしすぎだ。」

「ああ悪い。」

たいして悪びれずに大助は答えた。

慣れているのか信太郎は、すぐに仕事探しを始めた。

「最近だいぶ治安も落ち着いてきたからなあ。」

仕事っていつでも・・・」

ぱらぱらと紙をめくる音が茶屋に響いた。

「つつか、おめまだ頼吉に様なんてつけてんの？」

「当然だ。」

「いい加減気づけつて。あの餓鬼がお前見るとき、いつも父上えつて叫びそうな面してっぞ。」

「それではいけない」

「・・・いずれ、お前の主になるんだかならねえんだか知らねえけどよ。」

ちいとばかり固すぎるだろう。まだ幼えんだ。

親父がお袋ぐらひは欲しい年頃だろ。」

「それで、父になつても頼吉様を馬鹿にしているにすぎないし、何より本当の父親ではないから・・・」

「あーもー気にしすぎだっつの。」

この話は終りだ。

信太郎はなかなば呆れながら、そう言った。

「気がむいたら、あいつの父親になつてやれつて。」

大助はまだ何か言いたそうな顔をしたが、それを信太郎が遮った。

「あつあつた。おまえ、この宿で用心棒しろ。」

「用心棒？」

「ああ、宿屋みてえだが、どうも最近物騒らしくて、用心棒を探してるんだと

よ」

「で、それはどこだ？」

「このとおりを抜けてだな」

「少し遠いな」

「だな。いっそのこと全員むこうに引つ越したらいいんじゃないか」
「できるか？」

「近くの長屋に空きがあつたぜ」

俺が頼んどいてやるから。

「いつもすまないな。」

「なあに。」

そのかわり、前みたいに頼みごとは引き受けてくれよ。」

「・・・遊郭についていくのは御免だ。」

大助のその言葉に、信太郎はおおいに笑った。

式巻 水飴

「世話になった。」

「いいえ。ほな、殿様ところにも文を送つときますさかい。」

「いや、その必要はない。」

また、しばらくしたら、私のほうから書こう。」

「そうですか。」

よろしゅう頼みます。」

「ああ。」

大助は今まで住んでいた家の大家に代金をはらった。

後ろで、頼吉は不思議そうに大助を見上げ、もねは頼吉と手をつなぎながら石を蹴っていた。

「急だな。」

「仕事がいりました。」

申し訳ありません。」

「いや……、その何処に住むのだ？」

「少し遠いですが、江戸の中ですから。」

「そうか……。」

大助は頼吉を目線を合わせるためにしゃがんだ。
すこし明るい髪の毛が風になびいた。

「この仕事が終われば次第、もう一度、上田に帰省しようかと考えておりますが、いかがいたしますか？」

「上田……相分かった。」

頼吉は目をまんまるくさせながら、頷いた。

上田へ帰るのは3年ぶりだった。

歩いているうちにもねが立ち止まってしまった。

目先を見ると、甘そうな飴が売っていた。

「もね、欲しいのか？」

頼吉が尋ねると慌ててもねは歩き出した。

*

ああ。

つい飴を食べたくて、立ち止まってしまった。

はしたないって思われたかな・・・？

私は恥ずかしさを隠すように、頼吉様の腕を引っ張った。多分、これは無礼に値するのだろう。

あとできつと大助様に叱られてしまう。

きゅつと唇をしめていたら、その口先に水飴があたった。

頼吉様が水飴を手にして、私に渡してくださったのだ。

「大助が買ってくれた。」

感謝をするなら、大助に言ってくれ。」

私は頷いて、大助様に深くお辞儀した。

「頼吉様が最初におっしゃったのだ。」

お礼を言いなさい。」

私は、また頼吉様のほうににこつと笑いながら、お辞儀した。

すると、頼吉様は少し、恥ずかしそうにぷいっつと顔をそむけた。その様子を見ていた大助様も含み笑いをしながら、先を急いだ。

弐巻 水飴（後書き）

この時代、水飴があつたのかわかりませんでした。
もしなかったのだしたら、すみません。

ちよつと今回は短かつたかもしれませんが、また気が向き次第更新
します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4218k/>

トリカエラレタモノたち

2010年10月9日07時19分発行